

パフォーマンスプロファイリング活動が大学女子ハンドボールチームの 集団凝集性及び集合的効力感にもたらす影響

長瀬 亜矢子 (202111247、ハンドボールコーチング論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：コミュニケーション、戦術班、試合への出場頻度

【目的】

複雑なスポーツパフォーマンスを評価する一つの方法として、パフォーマンスプロファイリング（以下 PPF と略す）というアプローチが開発されている。これは多様な競技種目に対応可能であり、チームで活用することの効果が示されているにもかかわらず、その理論的枠組みは十分に明らかにされていない。そこで本研究では、PPF の活用と改善に役立つ基礎資料を得るために、大学女子ハンドボールチームを取り組まれた PPF の成果について、スポーツ集団の心理状態を手がかりにして事例的に解明する。

【方法】

調査対象は、筑波大学女子ハンドボール部員 21 名であった。対象者は、PPF を用いたミーティングを令和 6 年 2 月から 5 月にかけて行った。対象者の属性については、学年、ポジション、競技歴、競技成績、戦術班への所属、試合への出場頻度を調査した。

集団凝集性に関するアンケート調査(13 項目、9 件法)、集合的効力感に関するアンケート調査(20 項目、5 件法)を PPF 実施前(2 月)と実施後(7 月)に行った。PPF に対する選手評価(26 項目、5 件法)を実施後(7 月)に行った。

集団凝集性及び集合的効力感を実施前後で比較するために、対応のある T 検定を行った。また、PPF に対する評価を構成する因子を明らかにするために、主因子法による因子分析を行った。さらに、それぞれの調査について、属性間での比較を行うために、独立した T 検定または一元配置の分散分析を行った。統計処理の有意水準は 5% で検定を行った。

【結果】

(1) 集団凝集性

PPF 実施前は 6.47~8.87 点の範囲にあった。このことは対象者がすでに高かったことを示している。一方実施後は 6.73~8.53 点の範囲にあった。13 項目中 1 項目において前後で有意な差が認められた。属性別の前後比較においては、戦術班所属、試合への出場頻度において有意差がある項目が実施後に少なくなった。

(2) 集合的効力感

PPF 実施前は 3.60~4.60 点の範囲にあった。一方実施後は 3.53~4.47 点の範囲にあった。20 項目中 1 項目において有意な差が認められた。属性別の前後比較においては、戦術班所属において有意差がある項目が実施後に多くなった。

(3) PPF に対する選手による評価

因子分析の結果 5 つの因子が抽出され、それぞれ「成果」、「方法」、「コミュニケーション」、「相互理解」、「活用」と命名した。戦術班所属部員が非所属部員より、レギュラーが準レギュラーよりそれぞれ「コミュニケーション」因子の評価が高かった。

【考察】

PPF ではチーム内の役割の有無にかかわらず発言機会が設けられているため、戦術班に所属しない部員のチーム運営への自覚が生まれ集団凝集性に関して有意差がなくなったと考えられる。また、PPF では部員自身が目標の設定を行うため、そこで目標達成に対する責任は全部員に生じる。このことが、出場頻度が低い部員の内発的動機付けを高め、出場頻度間に有意差がみられなくなった要因と推察される。

PPF で集合的効力感に関わる要因を目標として設定した際に、戦術班所属の部員の方が得点が低くなった。このことは、戦術班が改善点についてより多くの気づきを得たためと推察される。

戦術班所属部員やレギュラーは部員全体の中でコミュニケーションをとることに慣れているため、PPF の「コミュニケーション」因子の評価が高くなり、有意差が生じたと考えられる。ミーティングの頻度を増やしたり PPF を長期的に行ったりすることでこの差は小さくできると考えられる。

【結論】

PPF は集団凝集性が元々高いチームに対してもそれを高め、PPF で設定される目標によっては集合的効力感を変化させる可能性がある。また、集団凝集性及び集合的効力感は、選手の属性によって差が生まれやすい。